

商業空間



ロンドン発ブティック最前線

都市の「顔」を担う
再生プロジェクト

大舞台で競う光の演出
～六本木ヒルズ

2003 WINTER

繊細な構造の魅力を引き出す

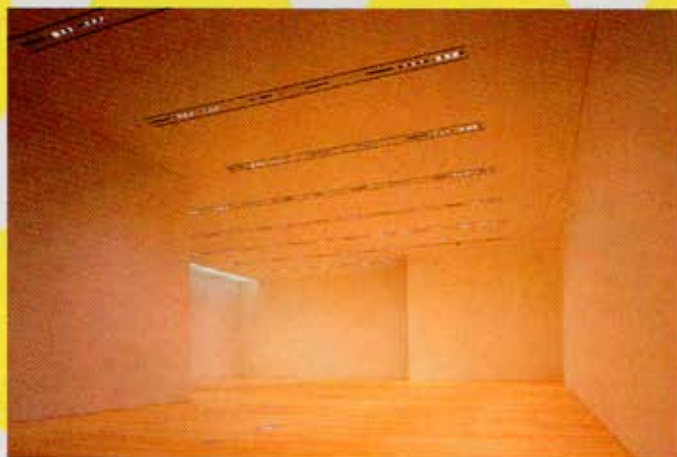
キルトブランニングオフィス

六 本木ヒルズの目玉のひとつは、森タワー最上部の52階・53階に設けられた森美術館だ。キルトブランニングオフィスの豊久将三氏は、森美術館を中心に、そのエントランスとして地上階に設けられたミュージアムコーンからブリッジ、エレベーター、展望フロアなどに至る出口までの動線上の空間の照明デザインを担当した。

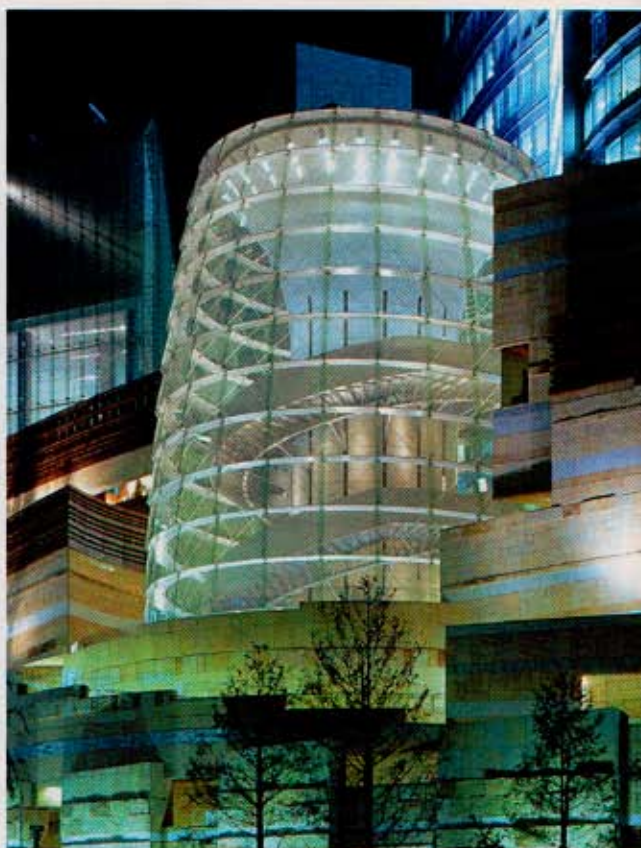
ミュージアムコーンは、だ円形平面の円すい状構造物で、白いドットを焼き付けた268枚のガラスで覆われている。一方、内部中央のエレベーターシャフトはラッパ状で、壁面にはPCパネルが張られている。豊久氏は、温かみのあるハロゲンでガラスを、白いCDMでPCパネルを照らした。「色の違う光を使うことで透明感を出した。セミの羽のように透けたきれいなものに仕上げたいと考えた」と狙いを語る。

森美術館では、天井内にすべての照明器具を納めるとともに、空間全体に均一に光が回るように計画している。展示室を満たす光は、2600mmピッチで天井面に設けた、わずか50mmのスリットから放たれたもので、豊久氏ならではの取り組み方で実現した。

豊久氏の仕事の特徴は、ランプ自体の形状や反射板などを自ら光学設計し、リアルなCGシミュレーションを駆使しながら検証して特注でつくることだ。「建築や展示内容に合わせ、その度につくっていくのが基本的な姿勢。でなければ、建築の個性が出せない」と語る。



2003年10月18日に開館した森美術館では、50mmという狭いすき間から光が拡散するように、ランプの光学設計を行った。光源はハロゲン。空調や非常灯、スピーカーも入れるなど、「照明というよりは天井パネルのシステムを提案するような仕事だった」（豊久氏）



上/ミュージアムコーン（建築設計：森ビル、グラックマン・メイナー・アーキテクトズほか、構造設計：仁藤 喜徳・藤川 由美+DMPほか）。主構造体のエレベーターシャフトに張られたPCパネルが、むらなく見えるように配慮した
下/水平圧縮リングと斜めケーブルで構成される高さ20mの構造物だ。外壁のガラスについても、満遍なく光が拡散して当たるようにデザインしている。また、どこから見てもグレアが気にならないように注意した